

# 読売俳壇

## 矢島 渚男 選

飯粒が碗に貼りつき道元忌

東京都 伊東 茂樹

【評】道元の忌日は知られないが、1253年数え54歳で亡くなり、9月29日に永平寺では法要が行われている。飯粒一つも粗末にしない厳格な修行で知られる。作者はこの寺で修行した人かと想像したりする。回転の遅き頭に赤とんぼ

砺波市 野村真里恵

【評】老いて頭が良く「回転」しない。そんなことを知ってか赤トンボが親し気に止まってくれた。何となく嬉しい。率直な句で好きだ。ファールもシートンも好き網戸の夜

南房総市 山根 徳一

【評】『昆虫記』や『動物記』で知られる学者。今年植物の牧野富太郎が身近に感じられる年になった。それぞれの不調語りと和む秋

浜松市 野畑 明子

草繁り空き家は人を寄せつけず

宝塚市 広田 祝世

角とれて老いとは云わぬ敬老日

千葉市 中村 重雄

つつましくへくそかずらの咲いており

飯田市 井原 修

唐黍や多産多死なる昔あり

川口市 高橋まさお

敗戦日語り部はみな卒寿超え

長野市 中沢 義寿

焙烙に煎らるる如き迎え盆

鴻巣市 関根 正

## 宇多喜代子 選

道の駅四方を囲む蕎麦の花

埼玉県 竹本 遊児

【評】「道の駅」とは近年各地に出来た交易の場。この道の駅の周辺は蕎麦畑。今や蕎麦の花が真っ盛り。そんな立地がよくわかる句。白菊と黄菊の献花終戦日

横浜市 福寿たか子

【評】終戦記念の日。この日のための式典に用意された菊の花の白と黄が、戦火に果てた人たちへの鎮魂の意をよく表している。子供等が風になったよ芒原

神奈川県 中村 昌男

【評】芒原を吹く風。遊んでいる子供をいっしょに誘い込み風の仲間にしてしまったようだ。芒原の広さや奥深さ、子供等の表情までが見えてくるような句。夜の秋会話のような独り言

春日部市 相沢 明子

鈴虫や今日の嬉しい事三つ

山形県 沼沢さとみ

マツカーサーのことなど思ふ終戦日

高島市 足立てるを

新米と大きく書かれ店頭にて

三条市 星野 愛

子の描く月の兎は左向き

横浜市 小林 千秋

秋空の深さを映す水溜り

北見市 藤沢 直美

猫の名をふと呼んでみる十三夜

茨木市 木川 志佳

## 正木ゆう子 選

直ぐ出せる棚へ播鉢とろろ汁

尾張旭市 小野 薫

【評】仕舞ってあった播鉢は、ふだん用のより余程大きいのだろう。大家族なのか、好物のとろろ汁には、このサイズが必要。食欲の秋。これから出番の増える大播鉢である。彼岸花この辺りかと水を捨つ

奈良県 若林 明良

【評】いきなり茎が出て花が咲くまでは何処に球根があるかわからない彼岸花。庭だから見当がつくのか、何となくその辺が気になる彼岸前。もう少し見てみたき馬瓜の花

白井市 酒井 康正

【評】季語が八音なので、残るは九音。いま十音ある前半を一首減らせば万全だが、このままでも、花を去り難い思いの滲む良い句だと思ふ。蜥蜴の子蚯蚓手放し逃げ失せぬ

大阪府 池田 寿夫

かなかなの静けさを呼ぶ間合ひかな

奈良市 奥 良彦

ぐい呑みも沢庵もあり夕端居

つくば市 潮田 清

満月や窓全開の工場風呂

川崎市 堀尾 笑王

校門の半分開く夜学校

土浦市 今泉 準一

大相撲四つに静けさありにけり

北本市 萩原 行博

「あついね」を言ひつくしてや夏惜しむ

相模原市 水野しづ子

## 小澤 實 選

人生でいちばん水分とった夏

相模原市 相模湖福幹

【評】この夏非常に暑く、とてもなかった。たしかにこの作者の感じたところに共感する。ぼくも水筒を持ち歩いて、よく水を飲んだ。肉体を通して、この夏を捉えているのだ。ガパオライスの屋台出す夢夜学生

東京都 岩崎 美範

【評】ガパオライスは、肉と紫蘇の一種を炒めたものを飯とともに盛り付け、目玉焼きを添えたもの。このタイ料理を選んだのが現代と思う。CDを身に纏ひたる案山子かな

日立市 菊池 三夫

【評】衣を着せて、人間に近づけるというより、光を反射させることで、鳥をおどそうとしている。新しい発想の案山子である。野分後の空の濃き青明日定年

奈良市 宗平 圭司

秋晴や進水式の銀の傘

倉敷市 中路 修平

下総の滴る梨に齧り付く

入間市 松原 正憲

水溜り嬉嬉と踏む子や台風裡

東京都 天地わたる

サイレンの音の湿りや原爆忌

仙台市 鎌田 魁

さんま焼くけむり隣の換気扇

名古屋市 山内 三維

古希の子が酒下げて来る敬老日

川崎市 西 順子